

「有線放送電話」の

思い出

樹木の幹の横断面に、同心円状に現われる模様を「年輪」といい、成長とともに歴史を刻みます。時代は「昭和」・「平成」・「令和」と変わり、2021年には日本で2回目となる東京オリンピック・パラリンピックが開催されました。

有線放送電話の普及 青梅では三田農協管内が最初

遡ること、昭和30年代、まだ地方には電話のある家は少なく、電電公社（NTT）に電話を引くにも契約には時間がかかりました。そのような中、全国の農山村を中心に通話と放送の2つの機能を持つ有線放送電話（通称ゆうせん）が普及しました。東京都では、昭和32年に初めて、旧羽村町農協管内（現西多摩農協）に有線放送電話が開通し、この年には、有線放送電話に関する法律もでき、全国へと急速に広がっていききました。昭和34年11月には、旧三田農協管内（現西東京農協二俣尾支店管内）で開通しました。開設に当たり、国・東京都・青梅市からの補助金を受け、残りを農協と加入者が負担し加入者の負担金は5000円でした。加入申し込みは各支部に依頼した結果、796軒の申し込みを受け管内総軒数の約75%を超えるもので事業に対する関心の高さと、大きな期待が寄せられているのを感じられました。当時の電話機にはダイヤルがついておらず、通話をするには農協の電話交換台で電話交換手がつなぎ相手と通話ができるようになっていました。また、地区内のJR青梅線の5ヶ所の駅舎や御岳登山鉄道駅舎に公衆電話を置き、自治会館、消防団詰所などの公共施設にも電話機が設置されていました。

昭和30年代から50年代 地域をつなぐ立役者 暮らしになくってはならない存在



開通1周年を記念して

児童・生徒の作文募集

そして、開通1周年を記念して地元の小中学校の児童・生徒の皆さんから作文の募集を行い、有線放送で呼びかけた結果84点にもおよぶ応募がありました。そのなかの、最優秀賞作品をご紹介します。

『線一本で結ばれた。』

中学3年生女子生徒

「何番、何番、あのーもしもし……」と一日に何回となく一本の線の上をいったり来たり、言葉と言葉が交わされます。商売に、友情に、連絡に、または毎朝のカレンダーというように、私たちの日常生活に実に重大な働きをしている。では、有線のなかった頃を振り返ってみよう。回覧を頼りの連絡でしたので、とかく遅れたり忘れられたりして、完全に山のすみずみまで行き届かなかった。また、農協や商店などへの用事も、いちいち出掛けに行かなくてはならなかった。

しかし、不便とも感じず生活して来ました。親から有線の話聞かされてもピンと来なかったのに、去年の夏から工事が始まって、柱が立ち受話器が置かれて、いよいよ完成の11月22日の通話開始。組合長さんの声が、線の上を流れて聞こえて来た時は、実にうれしかった。

〈中略〉

最後にもう一つ。私達学生にとって、目覚まし時計の代わりをしてくれる、6時の音楽。夜分の勉強づかれに床の中でうつらうつらしていると、音楽が聞えてくる。きれいな声で「おはようございます。御機嫌よくお目ざめですか。」ですっかり目がさめて、気持ちよく起きられる。巻くのを忘れていた目ざまし時計が、枕元で黙っていても、母に毎朝ふとんをはがされなくても、かならず起こしてくれる朝の音楽。

これからも大いに活躍し、つかれた人達に活を与え、ある時は知恵を与えて下さることを祈ります。青梅市

旧七ヶ村にさきかけて、三田地区に生まれた有線電話。満一周年を迎え、話す人、放送を流す人、みんな上手になりました。あの黒くて小さな有線電話。音楽の聞こえる有線電話。大いに役立て、かわいがりましょう。

全自動(A型)有線放送電話設備導入を計画したが、紆余曲折

有線放送電話設備は5年ごとに運用許可の更新を行うことになっており、この時期に合わせて、線路設備の更新を含め、全自動(A型)有線放送電話設備導入を計画して、昭和39年5月許可更新時に自動化(A型)するという計画案を総会に諮り、承認されました。この年、農協では新しい事務所の建設工事を進めており、「有線放送電話」の自動化もこの工事の進行と合わせて行うことになりました。

その後、昭和50年代に入り、交換機の老朽化が進み、部品の供給も非常に困難となり、数年後には存続するのが不可能で、廃止するか新たな方式に転換し存続させるのか、検討を迫られることになりました。昭和52年の総会では、率直に状況を説明し、年度内に存続か廃止か、方針を決めたいと諮りましたが、廃止の意見はありませんでした。翌年の総会でも、「基本的に存続する。」ことに決まりました。

昭和53年に入って間もなく、我が国で初めての電子式施設を導入する準備を始めることになりました。そのようなか、新農業構造改善事業実施計画の一環として、国の助成によって農村情報連絡施設の改善が出来ることになりました。

その結果、幸運なことにテストケースとして、全国で初めて旧三田農協と兵庫県五色ヶ丘農協の2つの施設が助成対象に決まりました。またとないチャンスに施設更新を進めていくこととしました。ところが、第2次オイルショックの影響や都市計画法に基づき、市街化調整区域と市街化区域の線引き見直しが行われることになっていました。その結果、地域の意向を尊重し「新農業構

造改善事業の取り消しを受けても市街化区域への編入を希望する」と決定、これにより「有線放送電話」が補助金対象から外されることになったしまいました。ところが、すでに設備の一部を発注済みであり、製造過程に入っているので中止することは出来ない状況になっていました。事業総額は1億2500万円、止むなく青梅市に4200万円を補助金として助成を、また地元沢井地区環境施設整備委員会に対し、環境整備基金から7000万円の配分をお願いすることになりました。その結果、地域の皆様からは、温かいご支援を戴くことができ、地区環境施設整備委員会は市長に対し基金の交付を依頼しました。これを受けて青梅市では、市議会に諮り、その結果、議会の承認が得られて、市の補助金が57年の年初に、基金は3月に交付されることになりました。

電子式自動有線放送設備が完成

以後、工事も順調に進展し、追加加入者の工事もあり、5月31日には試験通話が開始されました。

6月24日、青梅市の立ち会いの下に、日本有線放送電話協会の完成検査が行われ合格したため、26日の午後2時より、電子式自動有線放送設備の完成祝賀会が旧三田農協本店で開催されました。

施設の運用にあたり、東(あずま)東京都知事をはじめ国外ではフランスから、また、国内でも視察が相次ぎ

注目されました。

特に、電気通信分野では技術革新の時代になり、素晴らしい機能を持った設備が次々と生産されてきました。そのような中、「有線放送電話」は本来であれば新たな設備へ定期的に更新していくのが理想でしたが、設置から20年を経過して、これからの費用負担等を考えるとすでに限界が来ていました。また、農協合併を控え運営面において厳しい状況でした。

『ゆうせん』の長い歴史に幕

そのようなことから、平成12年1月に第1回有線放送推進委員会が開催され、施設の実情が報告されました。その結果、3月末日で維持料にもとづく運営を中止し、6月末で全面的に廃止する方針が示されました。そして、平成12年3月24日に開催された理事会において、方針が承認され、6月25日の第11回旧青梅市農業協同組合通常総代会において廃止することが決議され、廃止が決定し、『ゆうせん』の長い歴史に幕が下ろされました。

むすびに

有線放送電話が開設されて60年を経過して当時を知る人も年々少なくなってきました。私は、昭和53年に入職して約5年間業務に携わりましたが、「有線放送電話」は地域の情報発信元で災害時や事件・事故の緊急放送など地域になくはならないものでした。そして、自然災害などで故障が発生すると修理に駆け付けますが、なかなか故障箇所が見えできず苦労したことを思い出します。現在、当時の業務を経験した職員が2名在職しており、時々思い出話や苦労話をしております。これからも、「有線放送電話」について語り継いでいきたいと思えます。

参考文献『有線放送電話のことごとく・有線で 築く人の和 地域の輪』著者 福島和夫(青梅市御岳本町在住)

代表理事専務 森田 美実



笑顔

みんなのまちに
『笑顔』の窓口

えがお



耕そう、大地と地域のみらい。